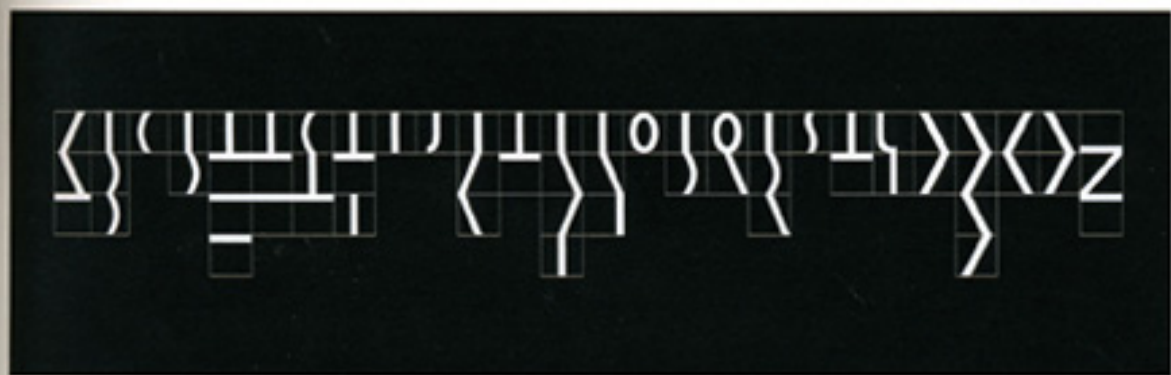


これがアルファベット？ 再構築された文字の未来形。



上から2001年、シアターのために制作した「レイン」と「マクベス」のポスター。「マクベス」は「カへの無慈悲な欲望」を、「レイン」はあらゆる要素はつながっていること、リズム、動き、まとまりを表現したかった。同シアターのために2004年制作した「愛の勝利」、SCAMの招待状。中央：文字の構成要素の分解がベースになった、アルファベットの。下：94年ローマのアトリエ。



「解き明かせない夢は、読めない文字のよう」(タルムード)
理解不能なつじつまのあわない夢と読めない文字は似通っている。そんな夢を思わせるのが、カトリーヌ・ザスクの作り出すタイポグラフィだろう。
不規則な「スペース」、そこにはメッセージが潜む。
カトリーヌは、その独創性においてフランスでいま一番注目されるグラフィック・デザイナーだ。彼女の作品をもっとも特徴づけるのは、1993年にローマのヴィラ・メデイシスに滞在し、着想した「ALFABET EN PO」(アルファベテンポ)だ。
それはアルファベットを分解し、骨組みだけにして再構築するというもの。カトリーヌは、インクでアルファベットを書き、そのにじみを利用したり、重ねた紙の上に文字を書いてさらに4つに紙を切ったりと、さまざまに試行錯誤を続け、ついにこの新たなタイポグラフィを作り出した。
「私はこれにアルファベテンポと名づけた。それは文字を分解して図案化することから生まれた。強制的に文字の細部を四角い枠にはめこんだようなもの」とカトリーヌはいつている。
無駄なものを含めて文字の本質に迫ろうとした結果、文字は記憶として



PROFILE

1984年ESAG(グラフィックアート高等学校)を卒業後、自分のアトリエをパリに設立した。7月下旬までバリのギャラリー・アナトームでザスク展を開催中。www.catzask.free.fr www.galerie-anatome.com

意味を成さないほどに解体され、読むことができない。まるで道化子を見ているような、不思議な感覚を持つ形へと生まれ変わった。
そして彼女の興味は尽きることなく、文字そのものから字間、行間といった「スペース」へと移っていく。
映画監督、ドゥニ・グーランの言葉をタイポグラフィの作品にしたとき、文字と文字の間に不規則な「スペース」を作ろうと思った。
「私はこれが面白いと思った。これはデザインとしての美しさだけでなく、「スペース」が見る人に見た目以上の意味を感じさせる効果があることに気づかされたから」。この作品は後に、隠れた空間の暴露と名づけられる。
それは行間のニュアンスを視覚として訴えかける試み。話し言葉でいう「間」のようなものだ。SCAMの招待状(上段左)もこの手法で創作されている。「すべての国、すべての人々を愛している」というメッセージの間の「スペース」が物語るものは、見る人に委ねられている。
人に言葉の意味を伝えるだけではなく、それ以上のイメージを与える彼女のタイポグラフィ。文字の本質を追求したその作品は、タイポグラフィというよりコンテンツポラリ・アートの領域に達している。